



発行 真宗大谷派 高山教務所  
発行者 出雲路 善公  
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地  
☎(0577)32-0776  
\*毎月20日発行 50,000部  
三市一郡無料配布  
印刷 山都印刷株式会社

# 念じられ 照らされて

## 飛驒の真宗門徒一人ひとりの物語

蒲池 勢至



〔略歴〕1951年生まれ。同志社大学、同朋大学卒、博士(文学)。「真宗民俗史論」(法蔵館)で第四九回柳田賞受賞。現在、同朋大学仏教文化研究所客員所員、名古屋教区長善寺住職。

野麦峠をようやく越えることができた。高山から安房峠を経て松本に至る道は、何度か通ったことがある。しかし、これまで野麦峠にはどうしても行けなかった。

なぜ、野麦峠を訪れてみたかったのか。四十五年前の学生時代に、山本茂実の『あゝ野麦峠』を読んでいた。それから一九七九(昭和五十四)年に公開された山本薩夫監督の映画「あゝ野麦峠」を見ている。その巻頭シーンは、いまでも印象深く記憶に残っている。明治から大正にかけて、飛驒の若い女性たちは根こそぎかり出され、「諏訪千本の煙突」と表現された製紙工場へ糸ひきに出かけた。その工女たちが、十二月二十五日ごろから

続々と野麦峠を越えて飛驒に帰ってくる。映画は、吹雪の中を命からがら越えるシーンであった。『あゝ野麦峠』には、木曾に出かけていた後職人が、「暮れに帰る時、野麦峠まで来たら大荒れの峠を越えていく工女衆に出会った。何百、何千という工女がお互いに体をひもや帯で結んで、大きな声で励まし合い、念仏を称えながら峠を越えていくのを見た」と語っている。そして、映画の場面は一転して、華やかな正月と報恩講風景が描かれていたと思う。飛驒古川の「三寺まいり」である。

『あゝ野麦峠』は、飛驒に生きた真宗門徒の記録である。山本茂実は数百年の女性たちから、次のような貴重な聞き取りを  
「野麦峠と工場でのことは、悲しかったこともうれしかったことも、何もかもありたいこと(ごさい)です。おかげで私のような者でもこうして生きてこれました。今、何を食べても何をしても、あの岡谷の工場で働いたこと、あの雪の峠を越えたことを思えば幸せで幸せで、こうしていただく一杯のお茶もありたいこと、もつたいないことばかりでございます。」  
ここには、飛驒真宗の念仏に生きていた女性の姿がある。近代日本の資本主義形成期に富国強兵政策、親や家族のために劣悪な環境のなかで必死に働いた女性たち……。彼女たちは年老いて人生を振り返っても、これ以上

上語ろうとしなかったという。現代の「人権侵害」という考えからすれば、権力や企業に対して批判精神がなかったとも言われよう。しかし、当時、女性たちは現実を受け入れ耐えることで精一杯であつたに違いない。そして真宗の教えと念仏が、工女たちの現実を根底で支えていた。だからこそ、生きることができたのである。映画では大竹しのぶ演じる主人公の政井みねが「百円工女」となったあと体を壊し、引き取りに来た兄の背中に負われて野麦峠まで至る。そして、「アゝ飛驒が見える」とつぶやいて死んでいった。十月半ば、新しく葺き替えられた銅板屋根がきらきら光る高山別院を後に、三六一号線を高根ダム沿いに走る。分かれて三九号線に入ると、すり替わりができない山道。紅葉には早かったが道沿いのススキが美しかった。訪れた野麦峠では資料館に入る。「野麦」の地名は、五十年から六十年に一度、隈笹に花が咲き、麦のような実を付けることから名付けられたという。新しい「お助け小屋」には、政井みね(二八八八〜一九〇九)の写真があり、若干、二十歳の生涯であつた。峠の「政井みね之碑」まで登ると、青空に映えた乗鞍がみえた。

**問** 葬儀の後には、やっぱり清め塩をしたほうがいいんやらか？

**答** 一般的に、人の死は「穢れ」として祓い清めなければいけないものとして考えられていますが、果たしてそうでしょうか。死とは人間が生きている以上避けられない身の事実です。葬儀とは、その事実を真剣に受け止め、亡き人を偲び、そしてその亡き人から生きていくというこの意味を問いかける大切な儀式です。それは悲しくも厳粛なものであります。生前に親しかった人は、亡くなれば「穢れたもの」で「お清めしな

ければならない」存在になるのでしょうか。  
お念仏の教えにおいては、亡き人は「浄土」に還られた「仏さま(諸仏)」であつて、清めるなどとはとんでもないことです。  
また、親鸞聖人は「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして、清浄の心なし」(『教行信証』信巻)として、「穢」は、自己中心的に、他人や自分を傷つけて生きている私たちの問題であり、その「穢悪」の存在である私たちに阿彌陀の本願がはたらくのだと示されています。  
亡き人から問われていることは、私たちがこの限りある生をどのように生きるかということです。煩惱の身をお念仏申して生きていくことが願われているのです。

### 別院真宗公開講座のご案内

たかはし ほうしん  
講師 高橋 法信 氏 (大阪教区)

2017年1月20日(金)①・2017年2月17日(金)②

テーマ「帰ろう、もとのいのちへ」

会場 高山別院 御坊会館  
時間 午後2時から4時 (両日とも)  
聴講料 各日600円

### 除夜の鐘と修正会

— お正月も飛驒御坊にお参りください —

高山別院では年越し前から除夜の鐘つきが始まり、年が明け、午前0時から本堂にて修正会が勤められます。修正会は、一年の初めに莊嚴を整え、身も心もひきしめ、仏恩報謝の思いをもって新しい年にのぞむ仏事です。ぜひ、高山別院にお参りいただき、新年の歩みを始めましょう。



除夜の鐘 12月31日(土) 午後11時45分 ※甘酒を用意しております  
修正会 1月1日(日) 午前0時 出雲路 善公 輪番  
1月2日(月) 午後1時 三島 多聞 氏  
1月3日(火) 午後1時 小原 正憲 氏

☎テレホン法話(0577)34(2313) ○12月21日〜31日:杉野明真氏「照蓮寺」 ○1月1日〜10日:出雲路善公輪番 ○1月11日〜20日:三本昌之氏「蓮徳寺」 宗教トラブル相談窓口(0577)3210763

家庭で読む

女と男の

ナムアマミダブツ ⑬

藤場 芳子



み 見えないね 歴史の中の 女たち

女たち

ノーベル賞の妻

それは今年のノーベル賞の医学生理学者に大隅良典さんが決まった時のことでした。にややかにテレビのインタビューに答える大隅良典さんは「家庭のことはまったくせずに研究に没頭しました。そういう私の姿を見て、妻は一生懸命に支えてくれました」と言っています。「妻の協力なくして今の自分はいない」ということはよく耳にするのでびっくりしませんが、会見の終わりが、同席した妻の万里子さんの発言にはびっくりしました。「私は若気の至りで早めに結婚してしまいました。きちんと勉強していれば、その後の人生はかなり違ったと思う。私は勉強を放棄してしまっただけで、若い女性はチャンスがあれば仕事をし、できれば自分の幸せをやらせて欲しい。これは若い女性研究者に向けた助言でしたが、一般の女性にも言えることではない

でしょうか。夫の前で堂々とこういう発言ができる姿に胸が熱くなると同時に無念さを感じたのでした。なぜ消えた?

興味深いのはその後、良典さんのインタビューが流れることはあつても、万里子さんの言葉は流れなかったということ。受賞者に脚光が当たるのは当たり前ですが、なぜ万里子さんの言葉はカットされたのか。男性にとつてはあまり気分がいい話ではないか、又は必要ないと判断されたからではないでしょうか。

恩師からかつて言われたことがあります。「物事は片方からだけ見ていては大事なこととはわからない。親鸞聖人が書かれた『教行信証』はインドや中国の僧侶達の書物からたくさん引用されているけれど、意図的に引用されていない文章もある。何を棄て何を残したのか、そここそ親鸞聖人の思考の跡があるのだから、原典と比べて読むことが大切です」と。私は熱心な学生ではなかったけれど、先生の言う通りにはしなかったけれど、おもてに出ていないことを見る大切さは心に留めていいます。だからなぜ万里子さんの言葉がテレビから消えてしまったのか気になるのです。

歴史の中の女性

言葉が残っていないということはある意味では発言しなかったことと同じです。その人物がいなかったことと同じになつてしまっています。だからこそ、活字として残していくことはとても大事なのです。

今回のカルタの句は「見えないね 歴史の中の 女たち」です。絵に描かれている女性は十二単を着てい

ますが、顔を隠しているのが誰かわかりません。つまりいるのにいないかのような存在なのです。歴史上の女性で名前が思い浮かぶのは、清少納言や紫式部など数えるほどしかいません。偏り過ぎているとは思いませんか。歴史は英語でストーリーと言いますが、それは「Story」、つまり「彼(男性)の歴史」だと聞いたことがあります。なるほど教科書や大河ドラマに出てくるのは武将など圧倒的に男性です。歴史はいつも男性中心に語られ、今もそれは続いています。

道を訪ね、道を拓く

女性の歴史が残されてこなかったのなら、女性自身の手で残していこうとしている人たちがいます。「ジョジョ企画」というグループでは、「姉妹たちよ」というカレンダーを発行し、作家、詩人、議員、医者、美容師、科学者など様々な分野で道を拓いてきた女性たちを紹介しています。冒頭には「女が女であることを高らかに謳いながら、道を拓いてくれた女たちへ、愛と感謝をこめて。女たちが連なつて生き、つづけてきた歴史のシッポに、わたしたち今生きている女たちがいる」と書かれています。「女のくせに」、「女だから」と言われて道が閉ざされても、自分で決めた道を拓き歩いて行つた「姉」たち。その人生にふれることで勇氣と励ましをもらう「妹」たち。失敗しても道半ばで終わったとしても、その足跡は残ります。あなたの周りにはどんな姉妹がいるでしょうか。

次回は酒井義一さんの「私を照らすひかりの言葉⑬」です。

飛騨御坊御遠忌七五〇「懇志」のお願い

現在、高山別院照蓮寺では、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌に向けた歩みが始まっています。二〇一九年五月十日〜十二日の三日間、ご門徒の皆様とともにおつとめする御遠忌法要をお迎えします。また別院が後世にわたつて、さらに飛騨地域の皆さまに開かれた心交わる場となりますことを願い、本堂等御修復が進められております。

当御遠忌を盛大におつとめするためにも、何卒御理解をいただき御懇念を賜りたくお願い申し上げます。

〈懇志のお願い〉 一般懇志 一口 千円より

別院会館事務所にてお預かりさせていただきます。お問い合わせは高山教務所まで。



懇志金千円以上記念品 木製花びらセット

飛騨御坊限定! 蓮の実念珠販売!

現在、ご坊(高山別院)にて「蓮の実念珠」を販売致しております。この蓮の実は、ご坊の蓮池で採れたものを使用しており、年間わずかししか採れない貴重なものです。

仏教において、蓮の花は浄土に咲く花として大切にされています。泥の中にあつて泥に染まらず、綺麗な花を咲かせる蓮の花。私たちもまた、煩惱を抱えたこの身のままに、私という花を咲かせたいものですね。

ご家庭のお内仏で、寺院で、阿弥陀さまに手を合わせ、お念仏される際のおともにいかがでしょうか?

念珠は一つ5,000円。少し高額ですが、高山別院への懇志としてお預かりさせていただきます。

問い合わせは高山別院(0577-32-0688)まで。ご予約承ります。



高山別院お煤払い奉仕のお願い



12月21日(水)午後1時からのおつとめの後、本堂のお煤払いを行います。私たちの聞法道場をきれいにして、新年をお迎えします。ぜひともご奉仕をお願いいたします。

※持参品 マスク・タオル・軍手 など

今月の一冊

暮らしの中の仏教語

(東本願寺出版)



810円(税込)

私たちが日々何気なく使っている言葉が48語紹介されておられ、一つ一つの言葉の源が仏教にあったこと、仏さまからの大切なメッセージであることに気づかされます。

手軽な文庫サイズになっており、一つの言葉ごとに読み切りになっております。是非、それぞれの言葉の奥にある仏さまからのメッセージに出会っていただければと思います。

大谷婦人会 新年定例会

期日 1月11日(水) 時間 午後1時から 会場 高山別院御坊会館 出雲路善公 輪番

甘酒の接待があります

ご回壇

1月

11日(水) 映芳寺

22日(日) 稱讚寺

「下」之町